

～文化的歴史的所産を巡る～

残したい情景

第28回 沖縄県沖縄市



一般財団法人 日本不動産研究所

沖縄県にかつて存在した、カタカナ表記の唯一の市「コザ」。市町村合併でコザ市は消滅したが、沖縄市中心エリアは今でもコザと呼ばれ、その呼び名は沖縄県民の間で広



英語や壁アートも目立つ「コザゲート通り」

く定着している。

「キャンプ・コザ」

「コザ」の名前の由来は、この地に置かれた宣撫隊本部や野戦病院、物資集積所等を「キャンプ・コザ」と称したことにある。そもそもコザは何のことかと疑問に思うところだが、これについては、キャンプがあった越来村（こえくそん）胡屋（こや）を米軍が誤読したという説や、これと隣接する美里村古謝（こじや）が混同した説等、諸説あるようだ。

あるようだ。

「コザ」の名称が定着している沖縄市中心エリアは、アメリカ文化が色濃く漂い、英字看板を掲げた店舗が並び、日本に在ることを一瞬忘れさせる。そうかと思いつく散策すると、アメリカ風の店舗構えに混じって、沖縄天婦羅の店や民芸品店等の看板が目に入り、最初の印象はすぐに裏切られることになるのだ。場所と時間が入り混じった何とも不思議な景色である。

には多くの人が

が集まり、現在に至る歴史のなかで、アメリカ文化と沖縄文化が融合した「異文化キャンプ」な街並みが形成されていったのである。こうして飛躍的に経済発展したコザ市は沖縄県中部の大繁華街となった。

異文化チャンプルーなコザ

色褪せていく基地の街



レトロでアートな「中央パークアベニュー」

他では見ることのできない街並みだが、米軍基地との歴史のなかで形成されたであろうことは想像に難くない。隣接する嘉手納に米軍基地が建設された後、米兵を相手にした店舗や娯楽施設が増えていき、コザ市は基地の街として大きくなっていった。この街

歴史の記憶を刻む

また、米兵相手に演奏するミュージシャンが集まるこの街には、多くのショーパブ等が並び、当時は那覇市より煌びやかな街であったという。しかしながら、米軍の統治から離れて40年以上が経過し、繁栄の面影を残しながらも、今のコザはどこかさびしい空気を漂わせている。かつての賑わいはなく、シャッターを下した店舗の方が目立っている。今でも紛れもなく基地の街であるのだが、輝きは年々色褪せていく。



繁栄が偲ばれる寂れた「一番街サンシティ」

大型ショッピングモールの建設や生活圏の郊外化等、考えられる理由はいくつもある。目まぐるしい勢いで開発が進む沖縄において、人の心が新しいものへと移ろいゆくのも仕方ないことである。それでも地域の個性が失われていくのはなんとも寂しいことではないか。

地元ではこの個性溢れる街並みを観光資源として活用しようと様々な検討がなされている。先人の残したものが地元の活性化につながり、後に受け継がれていくのであればこれに勝るものはない。いわゆる文化財と呼ばれるものではないが、歴史の記憶を刻んだ街並みは、守るべき我々の財産ではないだろうか。

（那覇支所／不動産鑑定士・関根俊雄）